

強い意志と思いやり

### 宮崎繁二郎 陸軍中将

教育問題プロジェクトチーム

今野 茂雄 陸自69

はじめに

宮崎繁二郎中将(以下 宮崎という)は、陸軍士官学校、陸軍大学校を卒業後、第8師団歩兵第31聯隊の大隊長として滿洲の熱河作戦において万里の長城を突破して勇名を馳せました。

また歩兵第16聯隊の聯隊長としてノモンハン事件末期において夜襲に成功し、ノモンハン作戦唯一の勝利者と称賛されました。

大東亜戦争のインパール作戦では第15軍の第31師団歩兵团長として昭和19年ビルマ(現在のミャンマー)のインパール作戦の師団目標であるコヒマの英印軍を連日攻撃したものの、時の経過とともに数倍の敵の反攻を受け、止む無く撤退している間にビルマ西南海岸に展開する第28軍の第54師団長に任ぜられました。その後、師団長として英印軍等による大規模な反攻と雨季に苦闘しつつ、山系・河川の障害を克服しながら第28軍の後衛部隊として数次の作戦を指導しました。そして南部ビルマに集結し終戦の軍命令を受領した

のは8月23日でした。

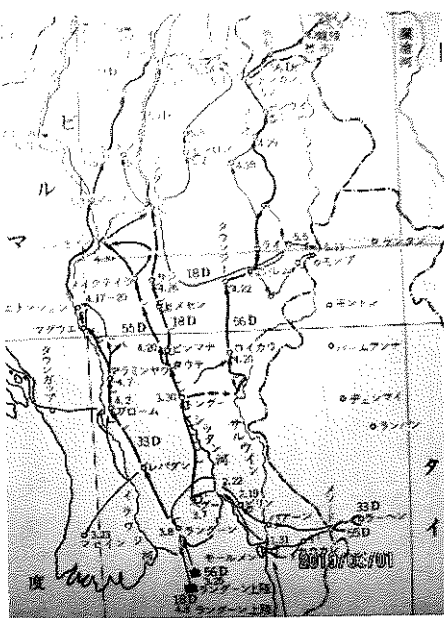
宮崎の人となりは、陸軍少佐で師団参謀として仕えた村田稔氏(8期)が次のように述べており、その一端を垣間見ることが出来ます。

「師団長としての宮崎中将は剛毅にして果斷、企図決心は明快直截であり、その指導は温容にあふれ、常に温かい信頼感の雰囲気に包まれていた。無口なまでに寡黙であつて、細事にわたつて指示されたことはなかつた。激戦苦闘の中にあつて、インパール作戦以来可愛がられていたポケットモンキー・チビ公の頭をなでながら、泰然自若たる姿は、『部下をして仰ぎて富嶽の重きを感じしめ』、動くや必ず先頭に在り、常に戦局の焦点に立たれたのであり、時折り『閣下、危険ですから……』と申し上げることがあると、温和な眼差しでうなずかれて、滅多に聞かれな

い口から、静かに『運命だからネ』と答えられるのであつた」

この中で「無口なまでに寡黙」とありますが、宮崎の長女道子も「およそ寡黙といおうか無口といおうか、『雄弁は銀、しかれども沈黙は金』というのを地で行つたような人だつたから、他人を誹謗したりすることは口外しない。自慢などはオクビにも出さない」と述べています。しかし立場が変わりその時の状況によっては違わざるを得

ビルマ攻略作戦経過要図



出典：大東亜戦争全史

なかつたようです。例えば、歩兵团長の折に將校に対する命令を指導する際は、戦史を引用しながら現地で明確に目標を示すなど、時と場合によつてはそうではありませんでした。

ここでは、紙幅の関係上インパール作戦以降について記述します。

#### 作戦の概要

ビルマは、大東亜戦争開始後、マレー半島、比島、インドネシアなど一連の南方作戦終了後において長期持久を図るため、南方地域の西翼の拠点となる戦略的要地と位置づけられます。インパールの作戦目的は、ビルマから中国雲南省への援將ルート(連合国から中国への援助物資のルート)の遮断と、当時英国の支配下にあつたインドの英

国への離反工作を推進する意義がありました。

このため、開戦当初からビルマでの作戦が検討されていたが、陸軍全般の兵力の関係から延期されてきました。昭和18年末には、北ビルマ及び西ビルマにおいて中国軍・英印軍の行動が活発になり、遅延していたインパール作戦が開始されました。

ビルマの地形は、西からアラカン山系、チンドウイン河、ジビユー山系、イワラジ河、南部にペグー山系、シツタン川、サルウイン河などの山系と大河が南流しています。

気候で特徴的なのは6月から9月にかけて世界でも有数の雨季になることでした。この地形の険峻さと雨季が軍の作戦行動を困難にさせました。

作戰を所掌する第15軍の目標であるインパールは、インド北東側インパール盆地の北部に位置し、英印軍にとつては日本へのビルマ反攻の基地でした。

第15軍の作戰構想は、第15師団・第33師団の2個師団でインパールに進攻し、佐藤中將の指揮する第31師団で、その北方からコヒマに進出、英印軍の兵站線を遮断するものです。

兵站とは、部隊の戦闘力を維持増進して作戰を支援する補給・輸送などの機能を指し、兵站線はその機能が作戰地域と後方において活動する路線を指します。

しかし、この作戰には、当初から問題点が指摘されてきました。それは、兵站、特に補給と輸送の不足です。近代の兵站は、後方からの継続的な補給・輸送が不可欠です。当時の軍の兵站能力からすると質・量ともに不足すると懸念がありました。しかも大東亜戦争開戦時と異なり、すでに日本軍の航空兵力は劣勢で、英印軍の編成・裝備・訓練は大東亜戦争開始時より格段と充実していました。

## 作戰開始

昭和19年3月15日午後9時30分、宮崎が所属する佐藤幸徳中將の指揮する第31師団は、3方面の突進隊に別れて、

チンドウイン河を渡河用鉄舟で渡河しました。

宮崎が指揮する歩兵団は師団の左突進隊となり、師団の南側の山地帯を突破して、コヒマ南側からコヒマへ前進するものでした。

宮崎は、左突進隊を三つに分け右猛進隊、中猛進隊、左猛進隊とし、中間目標をウクルルにしました。

大東亜戦争当時の日本陸軍の編制は、必ずしも同じではないので、ここで第31師団の基本的な歩兵聯隊編制を説明します。

聯隊本部（聯隊長 陸軍大佐）  
大隊×3（各1626名）

聯隊砲大隊×1  
作業小隊×1  
通信隊×1

（聯隊計、5587名）

また歩兵中隊の各兵員の携行品や装具を見てみると、その重量は40kgを越えます。体力のあるものは小銃の代わりに重い軽機関銃を持つのでから大変です。

山岳難路を移動する関係上、重機関銃、速射砲、大隊砲、聯隊砲等の重火器や火砲裝備の部隊は、通常の裝備数の半分を手分けて持つて行くことになりました。重量のある部分は分解して0m級の山々を次から次へと越えるの

で容易ではなかったはずで

左突進隊の宮崎支隊は3縦隊に別れて前進し、宮崎自身は司令部の先頭を歩きました。18日、インドとの国境を突破し、岷々たる山岳地帯を馬も象もなく全員徒歩で前進していましたが、先は断崖絶壁となっていました。そのとき將校斥候が「前進不可能です」と報告しますが、宮崎は、「前進し戦闘するのが歩兵ではないか。おれが先頭で前進するからついてこい！」と言いついて、繩を使つて絶壁を滑り降りました。指揮官が真っ先に行くので部下もついていかざるを得ませんでした。

コヒマへの途中、サンジャックにいた警戒部隊と思われる敵を連日にわたる夜襲をかけたましたが、損害が続出し占領できませんでした。それは道なき山岳地帯の前進により、火砲の到着が遅れ攻撃力が不足したためでした。攻撃4日目に火砲が到着したので、なんとか敵を駆逐し、一路コヒマに急ぎました。

## コヒマ陣地の攻撃

目標のコヒマへは4月5日夜突入しました。コヒマ市街地に着いたものの、英軍はコヒマ市街地を制するコヒマ南方の三叉路高地に強固な陣地を確保していました。宮崎は、三叉路陣地の攻撃準備において、攻撃担当中隊長を歩

兵団司令部付近で敵が見える地点に呼び、敵陣地の配備を細かく示し、中隊長の攻撃要領を質疑方式で指導しています。これはサンジャックの戦闘で多くの中隊長が戦死・負傷したため、聯隊長や大隊長の中間指揮官を飛ばした例外的な指導でした。

この頃、英印軍の増援部隊がコヒマに向かっているとの情報が入り、宮崎は敵の増援部隊のコヒマ到着前に目前の陣地を攻略することにしました。三叉路陣地への攻撃は南の高地から順次行われましたが、各陣地は幾重にも鉄条網などの障害物とトーチカがある複郭陣地で無尺蔵とも思える支援火力に守られ、航空機や戦車も出撃してきませんでした。宮崎は、連日攻撃させたものの被害が続出し、少しずつしか陣地を占領できませんでした。

4月中旬以降、英印軍は全面的な反攻に出しており、第31師団も苦境に陥りました。

5月4日、コヒマの英印軍は、歩兵、戦車、砲兵を統一した諸兵連合の攻撃をみせ、それまで善戦していた宮崎支隊の第58聯隊の兵力は減少し、補給がないため弾薬は僅かとなり、敵主力の攻撃を支えることが困難になりました。

## 防勢転移

5月11日頃、宮崎は、いよいよ力尽

きたと判断して12日夜、一連の三叉路高地陣地を放棄し、近くのアラズラ高地に後退し、この高地でインパール街道を向かう英印軍の突進を阻止することになりました。

6月2日、佐藤第31師団長は、軍司令部と補給について議論をした上で師団主力に補給のためにウクルル転進を命じました。ただコヒマの近傍アラズラ高地で英軍主力と死闘を繰り広げていた宮崎支隊は、第15軍の命令に従って、残置されました。

コヒマ南方に置き去りにされた宮崎支隊は、苦戦を続けていました。佐藤師団長が、宮崎に残した部隊は、兵力については、第15軍の命令より、大分少ないものでした。

しかし後に名將と言われた宮崎は、このような処置に対しても師団長も軍司令官も恨まず、不平を言わずただただ黙々と自分に与えられた任務を果たす努力をしていく人でした。

宮崎の回想によると、このとき「このような小兵力で敵を阻止せよと言われたとき、とくに無茶だと憤慨もしなかつた。いよいよ最期のときがきた。ただ、命のままに戦って死ぬのだと思いい、部下全員に必死奉公の覚悟を徹底させた」と述べています。苦境に立つてもいささかも動じない心構えがあつたといえましよう。

師団命令を受け、宮崎は1000名弱の兵力で、師団主力のウクルルへの転進を掩護しました。しかし、インパール陥落までインパール道を確保するためには、優勢な敵を4個師団と戦車1個師団に加えて航空兵力が相手にすることであり、これは容易なことではありませんでした。

このとき宮崎は、機略の限りを尽くし、各所に夜襲を繰り返して部隊が多量にみせたり、あちらこちらに炊事の煙を上げさせるなどして、戦国時代さながらに英印軍の前進を妨げました。

また、宮崎の持つ5個歩兵中隊を2つに分け、それぞれが交互に陣地を占領して後方に下がる遅滞行動をしました。

しかし6月20日、遂に宮崎支隊が守るマラムにおいて敵戦車部隊に突破され、22日には英軍はコヒマ〜インパール街道を南下する事態になりました。

こうして宮崎のインパール街道の封鎖・阻止作戦が破綻し、事実上インパール作戦は中止を迎えました。

陣地線を突破された宮崎は、街道から山地内に入り、展開していた部隊を集結させ次の行動を準備していました。軍命令により「ウクルル」に前進し、さらにウクルル付近において軍司令部から「宮崎支隊は爾今『祭』(第

15)兵団長の指揮を受けよ」との命令が入りました。続いて祭兵団長から、「祭兵団の転進を掩護しつつ、師団の後方を後退」という任務を受けました。この時すでに第31師団主力は補給のために転進していました。その後を祭兵団が転進する。その2個師団の後衛部隊を務めることになったわけです。

2個師団が通過した後には食料は一切なく、7月は雨季で道路は泥濘化し、道端には餓死者や死ぬ寸前の兵隊が倒れていました。歩ける兵隊はそれを見て見ぬふりをして通り過ぎる状態でした。このためこの通り道は、「白骨街道」と呼ばれるようになりました。

宮崎は、この目を覆うばかりの惨状に、佐藤師団長は、なぜ、まず兵を退却させて、自分が最後に残らなかつたのだらうか。黙って総後衛部隊である宮崎支隊とともに一緒に後退する、それが將軍の徳義というものではないか、と思っていました。

このような悲惨さを見て宮崎は、指揮下部隊の命令受領者を集合させ、次の指示をしています。

「宮崎支隊命令として、嚴重に以下のことの実行を要求する。一、後退途中、まだ息ある行き倒れの兵にあっては、必ずこれを救うこと。二、既に死亡している者に対しては、部隊名と姓名を控えたのち、道路から見えない所

に死体を運ぶか、または深く埋めること。以上。よいか。餓死した屍体を敵に写真に撮られて、宣伝材料に使われないよう。日本軍の退却は、このように立派だということを、敵に教えることも大切だが、もう一つ、戦友は絶対に捨てない、という考え方を確立することが、一番大切なのだ。軍隊として一番大切なことであるので、いま命令した二項目は、わが部隊がたとえ、それを実行することによって全滅してもよい。絶対に厳守して実行してほしい」との強い決意を示しました。戦いがながら退却する部隊にとつて傷病兵を後送することは相当の負担になります。が、それでもなお戦友を見捨てず、名譽を重んじることを強調していることは、部下將兵から絶大な信頼を得るものです。これは宮崎の真骨頂ともいえます。

ここで撤退当時宮崎の部下將兵が宮崎支隊長をどう見ていたかを紹介します。第11中隊長西田將中尉の「宮崎歩兵団長の思い出」によると、

6月20日、わがマラムの持久陣地は、ついに英軍の突破するところになりましたが、英軍の大軍を相手に戦っていました。ところが、西田の中隊は、大隊の全担送患者を輸送する任務を受けて、大隊の後尾を行軍していましたが、敵の攻撃を受け大隊主力と別れてしま

いました。中隊は患者をあわせて約60名ほどでしたが、大部分は半病人で、有力な敵を追って前進することは難しい。そこで西田中隊長は、まず後線のジャングルを突破して東に向かい、安全圏内に入ったところで、患者をウクルルに送り、その後、健兵だけで集結地に潜入するようにしたため多くの日数を要しました。宮崎は西田の中隊が行方不明になったと聞き、「あいつの中隊を掌握するまでは、全滅してもこの集結地を撤退しないぞ」と頑張っていたといいます。これを聞いた西田は、「この歩兵团長の下でなら、いつでも命を捨てて戦える」と思ったと述べています。

宮崎の部下に対する信頼と思いやりが部下の忠誠心を導き出しています。撤退間、陸軍中將への昇進が伝えられ、やがて師団長への転任の命令が発令されました。

### 中將に昇進、第54師団長として赴任

宮崎が赴任した当時の第54師団は、第28軍に属し、ビルマ南西部に位置する海に面した広範囲な地域に展開していました。

第54師団長として9月21日に着任し、司令部將兵に対し次の訓示をしています。

一、部隊あつての司令部である。決し

て司令部あつての部隊ではない。部隊のためには誠意をもって、骨身惜しまず努力せねばならぬ。

二、司令部内の人の和を考へること。量より質、質より和である。ゴタゴタしているようでは、決して的確なる部隊の指揮はできぬ。

三、司令部將兵は隸下各部隊將兵の活模範たるべきこと。(以下略)

この内容は、当時の第15軍司令部の態度や軍司令官と各師団長の不和を宮崎が反面教師と受け止め司令部に当てはめたものと推測できます。

しばらく、英軍に大きな行動はありませんでしたが、19年大晦日から艦砲射撃のもとにアキヤブに上陸してきました。この時以降、英軍の大部隊が逐次に進攻し、宮崎は計画的に後退していきました。

20年3月、軍司令部から第54師団をイラワジ河流域へ転用する準備命令が来しました。その頃、ビルマ方面軍主力は、ビルマ中部のマンダレーで英軍主力と対戦し敗退を続けていました。この不利な状況が続くと第28軍の退路が脅かされる状態になるため、転用する必要がありました。

ただ宮崎は、アラカン山系を撤退してイワラジ河の流域に向かうには、前面の敵に一撃を加えないと無事に撤退ができないと考へていました。そこで

敵に一撃を加えるためにレモ一の戦闘が起きます。

戦闘は、4月8日夜一斉に攻撃を開始し、連日激戦が続きましたが数千人の敵の包圍殲滅の機会を逸したものの13日には追撃に移り戦史に残る勝利を得ました。

### イラワジ河を渡河しパウカン・ベグー山系へ機動

14日夜、イラワジ河流域を撤収して東に作戦地域を変更しようとしていた軍司令部から、「54師団は主力をもって、速やかにアラカン山系以東に転進すべし」との命令を受けました。この軍命令以降、アラカン山系から撤退し、イラワジ河沿いに侵攻する英印軍を阻止しつつ渡河をします。イラワジ河の渡河は、英印軍の兩岸沿いの攻撃、航空攻撃、雨季による増水、渡河民舟の不足、渡河資材の皆無などにより難航しました。宮崎は約3週間、部隊の集結を待ち、その後10日間部隊の渡河にかかりました。宮崎は、この渡河において言葉少なく、温和な雰囲気微笑し、幕僚の報告を受けていましたが、5月5日頃、「できるだけ多くの民船を集めて山の迫った地点でイワラジ河を渡河しよう。しかし、患者は一兵といえども残してはならない」と示しています。

この部下への思いやりがその後の作戦の支柱となつていと言われている。

渡河において、歩兵团長木庭少將は、宮崎について次のように述べています。「師団が腹背に敵の攻撃を受け、イラワジ河の渡河不可能になった時、將軍は平然と右岸河畔に部下全員の到着を待っていてくださった時には本当に頭が下がった」と。

26日朝、最後の部隊が渡河を終了し、英印軍の包圍を突破し機動しました。機動先はベグー山系の西方パウカンです。ここには軍が師団に弾薬・糧秣を集積しているとのことでしたが、見当たりませんでした。このため今後には備え、6月1日の作戦計画ではパウカンにて約1カ月分の糧秣を確保することを目指しました。しかし、雨季に入り連日驟雨に見舞われて道路は泥濘化し、行動が困難となりつつありました。また英印軍による攻撃を受け、撃退していましたが、6月10日頃今度はコレラが蔓延し始め、防疫を強化したものの一向に衰える様子がありませんでした。このとき宮崎は、「師団の事後の行動に支障はあつても患者全員を取容携行する処置を講ぜよ」と参謀に強く指示しています。厳しい環境下でやり取りの中で人間愛・戦友愛の真姿を見聞きしたと参謀は述べています。

このような状況下、宮崎はパウカンを脱することに決め、6月16日ベグー山系に機動を開始しました。師団主力は6月下旬集結を完了しました。

### シッタン河の渡河・師団集結

シッタン河は、ビルマの東方タイ国境に近い流長200km程の河でタイへ行く場合避けては通れない河です。

シッタン河の渡河と前後の行動には次の問題がありました。航空優勢が英軍にあるため日中の行動が困難なこと、ベグー山系集結地からシッタン河へ行くまでは山林通過後はシッタン河平野で水田・部落が続く、英軍の攻撃を受けやすいこと、河には船はなく筏を組んで激流を渡河すること、渡河後は大湿地帯を行軍すること、などです。

7月14日、シッタン河に向け行軍を開始し、23日から各縦隊がそれぞれの地点で渡河を開始しました。

その際、参謀村田少佐は、シッタン河の渡河に際し、師団長に7月24日の全般状況を報告し、司令部は先に渡河し、到着する各部隊を掌握すべきと意見具申しました。その時、師団長は村田少佐の意見具申を聴取されるとニッコリされ、「前岸は師団集結地まで各隊長がやるだろう。後岸の掩護は自分がいるから自分に任しておくように」と言われた。落伍遅着の隊員がかなり

渡河点に集結しており、師団長としてこれらの隊員より先に渡河することを潔しとされなかったと思われた。師団長は掩護部隊歩兵第11聯隊本部の撤退を命ぜられ同夜半渡河された。このように宮崎は、重要な場面では最後まで將兵の行動を把握し、自ら確認した上で行動していたのです。

8月16日、師団は集結を完了し、終戦の軍命令を受領したのは8月23日でした。宮崎が指揮した第54師団のビルマ作戦期間中の総人員は1万6575人でしたが、終戦時の生存者は、4498人と言われており、実に73%の損耗でした。これは、英印軍の包囲網を脱したものの、雨季の悪路、イラワジ河・シッタン河の渡河、一方的な航空攻撃と英印軍の攻撃に曝され、体力の低下と病気等の総合的な結果といえます。その大変厳しい条件下にビルマ唯一の不敗兵団といわれた、第54師団を終戦まで指揮・統率し、戦局を左右する場面に赴き時には陣頭指揮、時には最後尾で指揮をした宮崎が名将と言われるのも道理といえます。

### おわりに

戦史研究家の秦郁彦氏は、宮崎について、「東京山の手の一雑貨屋の主人として生涯を終えた小柄で柔和な老人を、元将軍と知る人は少なかったはず

であるが、彼こそは満洲事変以降主要戦場には必ず登場して、不敗の記録をほこる数少ない名将であった。熱河作戦では、夜間二マイルの縦深を突破した大隊長として名を挙げ、ノモンハン戦では唯一不敗の聯隊長であった。一七年とくに手腕を買われて、重慶攻略作戦の突進隊長に予定されたが、作戦の中止でビルマに移り、悲惨なインパール戦で支隊をひきいて、コヒマインパール街道を守り、全軍潰走の中で、殿軍として一負傷兵も残さず整然と撤退した。そして最後には第54師団をシッタン川の対岸に移して後退した。彼は禅味の溢れた地味な性格であったから、華々しい虚名を得ることもなかったが、名指揮官であったと高く評価されています。

宮崎は、戦上手と言われていたが、それを支えていたのは、今後の起こりうる予測をしっかりと立てるとともに現状を認め、その状況に適合した部下の指導・訓練を徹底し、その上で部下を信頼していることです。

そこには宮崎の一貫した強い信念が認められます。ときには部下に厳しい要求をし、ときには細かい配慮をするなど慈愛をもつて接しています。例えば、コヒマからの退却場面やイラワジ河の渡河の場面では指揮官、参謀、負傷し

た将兵が感動する場面が随所にありました。

戦後は、世田谷区の下北沢駅前で陶器店を営んでいましたが、最後は、亡くなる8月の病床において、病にうなされて「敵中突破にあたり分離した小部隊を間違ひなく掌握したか」と尋ねていたといわれています。宮崎の心は、人生の最後に至るまでビルマの戦場で斃れた部下に思いを馳せていたようです。そこに宮崎の半生の核となる心を見る思いがします。

### 【参考文献】

- ・土門周平『最後の帝国軍人』
- ・豊田稷『名将宮崎繁三郎 不敗、最前線指揮官の生涯』
- ・増澤道子『寡黙の人―父宮崎繁三郎のこと―』
- ・森松俊夫『ビルマ作戦の全貌』完本・太平洋戦争(二)
- ・櫻井省三『シッタン河の敵中突破』完本・太平洋戦争(四)
- ・倉澤俊郎『シッタン河―兵 参謀長の手記―』
- ・陸上自衛隊幹部学校修練会『統率の実際3』宮崎繁三郎中将

- ・服部卓四郎『大東亜戦争全史』
- ・陸戦史研究普及会『インパール作戦上巻』『インパール作戦下巻』
- ・保坂正康『陸軍良識派の研究』
- ・秦郁彦『実録第二次世界大戦 運命の瞬間』